



都市医師会 だより

小樽市医師会・市立小樽病院 オープン病棟開設40周年記念講演会・祝典

—日本医師会会長唐澤祥人先生を迎えて—

小樽市医師会

広報・情報・医政部担当理事 高村 一郎

オープン病棟は全国に数多く存在すると思うが、市立小樽病院のオープン病棟ほど生き生きと有効に利用されている例は数少ないのではないだろうか。名前はオープンでも実際には病院の勤務医が診療を全面的に受け持っている場合が多いと思う。小樽では開業医が主治医として入院の際の指示から毎日の回診も含めすべてを自分の手で行っている。もちろん総合病院としての特性を生かして合併症のある場合は院内の専門医に紹介し、院内の高度な診断機器などを利用した検査は依頼するが、それらのオーダーは開業医が行っている。患者さんは外来から入院そして入院後の外来通院まで信頼する開業医を主治医として治療を完結することができる。

開業しているのだから自分の診療所から診療時間には離れることが難しいので、回診の時間も早朝の診療開始前や昼休み、診療終了後の夜間などになる。たいていの病棟では早朝や夜間には指示を受け付けないと思うが、市立小樽病院のオープン病棟では違う。その時間に医師と病棟看護師との間の連携がとれないと入院診療が成り立たない。オープン病棟に参加している医師は他人の休んでいる時間に診療を続けているが、病棟の看護師もこれに応じて両者の信頼関係とお互いの努力がこの病棟を支えてきた。

代々の小樽市医師会の会員は粘り強く40年にわたりオープン病棟を利用し小樽の医療を支えてきた。最近では専門化という名目で絶対に必要な一般的な疾患の治療を忌避する傾向が見られる。さらに医師不足も加わり市内の各病院の二次救急受け入れ体制の縮小が問題である。こうした流れのため小樽では高齢者の肺炎、糖尿病のコントロール、あるいは急性の原因のはっきりしない発熱など本来市立病院など公的病院の医師が担当すべき疾患を開業医がオープン病棟で診療する機会が増えている。救急車で自

院に搬入された初診の患者をオープン病棟に入院させることもある。小樽市内の救急医療に対してもオープン病棟は貢献しておりその役割は年を追うごとに重要性を増している。

昭和39年に当時の日本医師会会長武見太郎先生が病診連携と生涯教育のため医師会病院の設立を提唱したのに応え小樽市医師会は市立小樽病院内にオープン病棟を併設する方式を選択した。すでに小樽市内には市立小樽病院、市立小樽第二病院、済生会小樽病院（当時は北生病院）、小樽掖済会病院、小樽協会病院など小さな街に5つもの公的病院があり、さらに医師会立病院を建設する余地は乏しかった。当時の安達与五郎小樽市長（医師で市内に医院を開業していた）の積極的な後押しを得て小樽市医師会皆川忠雄会長、市立病院の福田良平院長（いずれも肩書きは当時）などの尽力により市立小樽病院にオープン病棟が37床の病棟として昭和44年1月に発足した。これは公立病院として日本では最も早い設立であった。以来40年にわたってかかりつけ医が自ら主治医を務め、外来・入院を一貫として継続的な医療を提供してきた。昨年当オープン病棟は「地域医療体制の確立及び医師の生涯教育に貢献した病院」として日本医師会の最高優功賞を受賞している。

小樽市医師会（城守会長）は、このように、市内の医療に貢献を続けている市立小樽病院オープン病棟の開設40周年をたたえる記念講演会と祝典を3月21日にグランドパーク小樽で160名の聴衆を集めて開催した。

記念講演には唐澤祥人日本医師会会長をお迎えし、「地域医療提供体制の将来像」と題してご講演いただいた。以下講演内容を紹介したい。

唐澤会長は、まさに小樽のオープン病棟が開設される頃に医師となった。大学紛争、インターン制度の廃止など多くの問題があった頃である。小樽市のオープン病棟は全国における医師会共同利用施設、共同診療、または病床のオープン化として全国に大きな流れを作った端緒となる、地域医療という視点から重要な取り組みであったとたたえ、市立小樽病院オープン病棟開設40周年を祝福した。また自らも最近まで公設民営で東京都医師会が受託運営している東京都リハビリテーション病院を通じてオープン病棟、共同診療に関わってきた立場からこの40年間にわたり小樽市医師会会員が大変な努力で支え続けてきたことを高く評価する。

唐澤会長は、超高齢社会を迎えている日本の社会保障制度から説き起こし、家族関係の変遷、地域社会の広域化などを取り上げ、今日ますます地域医療の重要性が増していると指摘された。国民医療の二本柱は地域の医療提供体制と国民皆保険制度とであるが、国民皆保険制度の成立したのは昭和36年だが、これによって初めて国民医療に優れた医療を提供することができるようになった。それまでは国民医療



は無かったと思う。明治以来戦前までは多くの兵隊を作るための医療に過ぎず、女性の健康は尊重されていなかった。労働環境や、出産の環境など多くの問題があった。飛躍的に日本人の寿命が延び、健康な高齢者が増えてきたのは国民皆保険制度ができ国民医療が確立したためであると考えている。

高齢者のためによりよい医療制度、良い福祉制度を作ることが今日進行している少子、高齢化社会に対する対策の第一歩であり、高齢者の皆さんが温かい国だな、温かい地域だな、良い医療を受けたなと感じていただける医療提供体制を作っていきたいと考えている。しかし日本の現状はグローバル経済の中で農山村、地方などで限界集落、崩壊しつつある地域が出現するようになってきた。日本の産業と経済が国民を追い詰めてきた現状がある。それは社会の中に格差が持ち込まれてきたことによって、地域、家庭が成り立ちにくくなって生きているためである。これからは等しく豊かな暮らしを求めていく時代になってゆくべきだと考える。

ところが、救急医療の体制にしても以前は救急隊が呼ばれて病院に収容するまで、病院を探すのにそれほど時間がかからなかったが、最近では救急車が患者宅に来てから病院に収容するまでの時間が大変長くなり東京都内でも30分を超えるとというところもない事態が起こっている。また救急医療ばかりでなく小児科医療、産科医療などにも問題が生じている。

これからは、旧来の疾病の枠を越えた包括的な地域医療提供基盤が必要で、そのような基盤があることで、お年寄りをはじめとした住民の暮らしを支えてゆくことができる。また今後国民皆保険制度の一層の充実をはかり、その下で疾病予防と保健事業がさまざまな年齢、就学・就業環境などにおいて取り組まれるべきであり、その際、まさに地域での取り組みが最も重要となる。日本医師会はそのために質の良い医療サービスを提供し、心身両面の満足を得られるよう努力してゆくとお話を結び、満場の聴衆に大きな感銘を与えた。

なお、オープン病棟開設10周年には武見太郎先生が、同20周年には羽田春免先生が小樽を訪れており、現職医師会会長に祝福していただくのは今回で3回目になる。

講演に引き続き祝典ではこれまで長年にわたってオープン病棟を支えてきた市立小樽病院院長鈴木隆先生、同総看護師長原田悦子氏をはじめ山田勝磨小樽市長などに感謝状が渡された。受彰者を代表して前小樽市医師会会長高橋昭三先生が挨拶の言葉を述べ、またオープン病棟を支えてきた諸先輩の功績をたたえた。



電子メールによる会員への情報提供について

—メールアドレスの登録—

◇情報広報部◇

本会では、インターネットを利用し、電子メールにより緊急性の高い情報を、会員の皆様に送信提供しております。対象は当会の電子メールアドレス利用者全員と他プロバイダの電子メールアドレスをお持ちになっていて、本会にアドレスを登録している会員です。

他プロバイダの電子メールアドレスの登録につきましては、随時受け付けておりますので、是非ご登録いただきたくご案内いたします。

●電子メールアドレスの登録方法

電子メールで、ご氏名、登録メールアドレスを明記のうえ、下記宛お送りください。

・申込先メールアドレス：add@m.doui.jp